

## 英 EU 離脱：何が問題なのか？

【訳者注】これは、先日の“英 EU 離脱国民投票”の前日に書かれたようである。結果は幸い、PCR の望み通りになった。最後に言っているように、英国国民は、ほとんどこの投票の意味がわからないまま、投票したのではないだろうか？ 我々にも、そもそも EU の本当の意味がわからない。PCR はそれをわかり易く解説してくれた。EU 結成は、やはり米帝国主義の都合が根底にあったことがわかる。違う見方もあるだろうが、とにかくこの説明はわかり易い。我々の関心事は、EU が崩れると、NATO も崩れるだろうということで、ロシア国境に今、大集結して攻撃姿勢を取っている NATO 軍にとって、つまり米帝国にとって、これは望まぬ方向のはずである。

Paul Craig Roberts

June 22, 2016, Information Clearing House



売春メディア（presstitute media）を読むかぎり、Brexit（英 EU 離脱）——明日、その国民投票が行われる——は、人種差別が争点になっている。その話の筋によれば、暴力的な傾向をもつ、怒った、右翼の人種差別主義者が、これ以上、黒い肌の難民をイギリスが引き受けなくてもいいように、EU からの離脱を望んでいるのだという。

離脱に反対の、絶え間ないプロパガンダにもかかわらず、世論調査では、残留よりも離脱賛成が多かったのだが、女性国会議員の Jo Cox が、ある証言によると、“離脱だ！”と叫ぶある男によって殺されるという事件が起こった。コックスは EU 離脱には反対していた。

英政府と売春メディアは、コックス事件を利用して、離脱派の背後には暴力的な人種差別主義者がいるというプロパガンダを、叩き込んだ。しかし、別の報告をする他の目撃者たちがいた。ガーディアン紙は、プロパガンダ路線をリードしていたが、後に、その説明で、「他

の目撃者たちによると、攻撃は、この議員が週ごとに開く議員面談室の近くで、2人の男による口論に巻き込まれたあげくに、起こったものだった」と書いた。もちろん我々に真相はわからない。なぜなら、コックスの殺人は、離脱の反対の武器として、あまりにも貴重だからである。

英国人の多くが、自分の国が変貌したことに、不満を抱いていることは間違いない。別に人種差別主義者でなくても、自分の国が、違った文化をもつ人々によって、盗まれつつあると感じているだろう。英国人は、侵入者を追い出してきた長い歴史をもっていて、その多くが、現在、侵略を受けていると思っているだろう——武力による侵略ではないにしても。もちろん、武力侵略は政府もメディアも支持しない。

移民はイギリスにとって、社会的に給料を吸収するよりも、貢献する方が大きいなどと学識者が言うとき、英国国民の聞かされる話は、彼らの実体験とは一致しない。

その上、多くの英国人は、安全上の心配のために、ロンドンをはじめ、都市部全体を避けねばならないことに、うんざりしている。

こうした心配を、文化防衛と言わないで、人種差別と呼ぶのは、プロパガンダの選択である。そしてイギリスの政治体制は、そのようなプロパガンダの選択をした。多くの英国市民が、もはや「英国体制」が英国を表すものと思わなくなったのは、無理もないことである。

しかし、プロパガンディストたちに対しては、疑わしきは罰せずの原則を取ることにして、今、議論の方便として、英 EU 離脱は、人種差別が問題なのだとしよう。離脱反対と言うが、本当は何が問題なのだろうか？ 完全に明らかなことは、英政府は、自分が協力したワシントンの行う戦争から、逃れてきた難民たちを、ぜひ助けるべきだと言っているのではない。もし英国体制が、それほどまでに、アメリカの侵略、爆撃、ドローンからの避難所を求めるムスリムたちを、大切に思っているなら、彼らは、これらの人々へのワシントンの攻撃を、支持したりしなかったであろう。

EU 離脱への反対は、2つの強力なワシントンの利害に基づくものである。

一つは、英国を金融センターの競争相手として除こうとする、ニューヨークの銀行やウォール街の、利害のためである。この明白な事実が、シティ・オブ・ロンドンや、バンク・オブ・イングランドの注意から、すり抜けていた。

英国人たちは、彼らが EU に、片足しか突っ込んでいないことを忘れていた。なぜなら英国

は、彼らの通貨をそのまま使うことを許されたからである。英国はユーロを使っておらず、したがって、英国政府の財政をまかなう権限を保持している。ギリシャ、ポルトガル、イタリア、フランス、ドイツ等々は、この力をもっていない。彼らは、財政を私立銀行に依存している。

英国を騙して EU に加盟させるために、英国人は特別に特権を与えられた。しかし、これらの特権は永久に続くものではなかった。EU 完成の過程は、政治的統合の過程である。何年も前に私が報告したように、その当時「欧州中央銀行」の総裁だった **Jean-Claude Trichet** は、ヨーロッパの政治的統合を完成するためには、加盟諸国の財政政策が、中央集権化されることになると言った。財政政策を中央集権化するには、もし英国が、それ自身の中央銀行と通貨をもつ、独立した財政センターであるとしたら不可能である。

ウォール街は、「英 EU 離脱」が敗北してくれれば、ロンドンの金融センターとしての寿命は短くなると踏んでいる。なぜなら、自分自身の通貨と中央銀行をもたなければ、一国が金融センターになることは不可能だからである。英国が EU の（完全）加盟国になりながら、欧州中央銀行の下で行動しないことは不可能だから、ひとたび EU 離脱の国民投票が敗北すれば、英国を徐々にユーロへ引き込む作業が始まるだろう。

もう一つの強力な関心は、一国の離脱が、別の国の離脱へつながっていくのを防ごうとする、ワシントンの関心である。「米ナショナル・アーカイブズ」に見つかった CIA 文書が明らかにしたように、EU は CIA の発案によるもので、その目的は、ワシントンがヨーロッパに、政治的支配力を及ぼしやすくするためである。28 の別々の国家よりも、EU を支配する方が、ワシントンにとっては遥かに楽である。その上、EU が崩れないようにすれば、ワシントンの侵略に必要な隠れ蓑である NATO も安泰となる。

EU は、ワシントンと“ワン・パーセント”（支配エリート）に奉仕している。それ以外の誰にも奉仕していない。EU は主権と国民を亡き者にする。その意図は、英、仏、独、イタリア、ギリシャ、スペイン、その他すべての国民を、“国民”として消滅させることである。**Brexit**（英 EU 離脱国民投票）は、この隠れたアジェンダを敗北させる、最後のチャンスである。そして、どうやら英国人は、明日、何が問題なのか、何の投票なのかを知らないまま、投票に行くようである。